

前田「火の山」合戦記(平曲の詞)ならびにその成立(完)

大津不二也

(七)

人名將の下に 弱卒なし 臣君心 同一に 相合はずとは
 云ひ乍ら 運定まれば 是非もなし 血気にはやる 春
 元公 味方の勇士を 励まして わめき喰って 斬り掛る
 大勢待機の 備へにて 突き進んだる 折柄に 遙かの方
 に 大音声 信太の次郎を 打取つたると 呼ばはる声
 を 南無三宝 その一日 戦へど 勝負更に 決せざり
 退き鐘打つて 双方が 陣所を設け 居る所 三百州より
 集まる大名 東海道より 加はる人数 敵は十万 その余
 に達し 浪華の浜より 河内は至る 松明篝火 万灯の
 如く 威勢よく 夜討の用意に 取り掛る 四方を囲む
 官軍は どつとおめいて 火の山の 陣所を目掛けて 攻
 め立って 不知案内の旅いくさ 味方の人数は 右往左往
 中将公は 声ありて 春「関白広直を 討ち取れ」と 所
 の日のいでたちを 見てあれば 七枚しころに 金の鉄形
 うつたるかぶと 頭上に載き 身に緋緘しの 大鎧 南部

前田「火の山」合戦記(平曲の詞)ならびにその成立(完)

月毛の 名馬には 金覆輪の 鞍を置き 大身の槍を
 引きしごき 我に続けと 一同が ここを先途と 必死の
 働き 中将公の お側には 吉田影迎 星野の太郎 左右
 にありて ありあふ松の木 引抜いて 当るを幸ひ 薙ぎ
 倒す 勇み進んで 中将公 広直卿の 御陣所へ 馬お
 どらせて まっしぐら 大地に響く 大音声 春「やあや
 あ関白 広直卿 おのれの官位を 望みに着て 人を人
 も 思はぬ振舞 従二位春元が 天に代りて 成敗す
 我が槍先を 受けて見よ」と 大音声に 呼ばはりたり
 本陣なれば 広直卿 床凡にかかり 悠然と 馬上の春元
 を ぐっと睨み 四「云ふな春元 悪逆などは 片腹痛
 し 関白職に 狼籍すれば 立ち所に ねめ殺してくれん
 」 春「いやーその高言は 後にして 最早逃がれぬ
 汝が運命 いざ尋常に 勝負勝負」 血のしたたる 槍を
 打ち振り 打振り 邪魔する臣を 突き立て薙ぎ立て 広
 直の 面前へ 立ち向ふたる 事なれば 四「やー猪口才
 な 青二才 斬り捨てくれん」と 広直卿 馬上に跨り

太刀を取り 斬って掛れば 春元公 春「物物しや」と
 駒を十字に 乗り廻わし やつとひと声 手練の槍尖しん 受
 け損じたる 広直卿 胸元深く 貫かれ 落馬致すを
 春元は 馬より降りて 小刀を 静かに抜いて 春「関白
 広直 怨みのきつきき 受けて見よ」と なんなく首を
 斬り落す 太刀に貫き 大音声 春「やあーやあー敵も
 味方も承れ 小丹の中將 春元は 関白広直を 討ち取つ
 たり」と 名のりかけて 傍の 床几を見れば 錦の帛紗びやくさ
 こは何ものと 手にふれ給ひ 開けば次郎 光直が 神よ
 り授かりし 金の扇 春「禁裏へ納め奉る 帝御受納 垂
 れ給へ」と 雲井遙かに 投げつければ あーら不思議や
 こは如何に 扇に後光 輝きて 禁裏の御所は 清涼殿
 辰巳の方に 舞ひさがる 此の故により 改めて 清涼殿
 を 取り消され 扇殿とは 申すなり 春元安堵の 思
 ひをなし 春「関白を 討ち取り 扇を納め 本懐遂げし
 上からは 戦ひ無益 朝敵の 汚名を受けし 我我は ひ
 と度城へ 立ち帰り 討死致すが 最後の手段 者共退け」
 と人数をまとめ 群がる敵を 蹴散らして 八勇士と共に
 火の山の 城山指して 御帰城を あらせられたる 春元
 公 城の出丸へ 火を移し 御本丸なる 大広間 中將
 始め 御台様 勇士一同 枕を並べ 事も哀れな 御生
 害 消え行く葉露 散る花の 帝はかくと 聞こし召し
 帝「逆臣ならぬ 春元を 関白広直が 悪意のため 朝敵
 と名を 汚せしは 愍然ひんの限り なり」と 歴史の中に

残されて 今の世までも 金言に 残る火の山 合戦の
 履歴をここに 巻き収め 語り伝へて 目出度けれV

(乙)の荒筋をたどってみよう。血気に早る春元は、味方の勇士を
 励まし、敵の中へ突き進む。その時、信太の次郎を討ち取ったとの
 声を、春元は聞いて仏に祈る。その日一日中戦うが、勝敗は決しな
 い。火の山勢は、夜になると、四方を官軍に取り囲まれるが、関白
 を討ち取るうと必死に戦う。お側には、星の太郎、吉田影迎が両側
 にあって奮戦し、春元は関白の陣所へ斬り込み、手練の槍で関白を刺
 し、怨みを晴らす。みると、傍の床几の上に錦の帛紗びやくさがある。開いて
 みると、それは信太の次郎が神から授かった金の扇である。春元が
 「宮中へ納め申し上げますので帝御受取り下さい」と言って、扇を
 空に向かつて投げると、扇は後光を放ちながら飛んで行き、清涼殿
 の南東の方へ舞ひ落ちる。(これから、清涼殿を扇殿と言ふようになったと言
 う)。春元は、これで安心し、朝敵の汚名を受けた我我は、いった
 ん城へ帰り、討死するのが最後の手段だ、皆退けと言って、軍勢を
 まとめ、群がる敵を蹴散らして帰城する。そして、春元は城の出丸
 に火をかけ、奥方・勇士一同と枕を並べて自害する。帝は、関白の
 悪巧あくたくみのために逆臣のように取り扱われる春元を悼いたまれ、歴史に
 書き残され、今日まで不滅の事として残る火の山合戦のいきさつが
 語り伝えられている。これは、ほんとにめでたい事である。

最初の部分(「名將の下に弱なし 臣君心同一に相合はずとは云ふ乍ら運定まれ
 は是非もなし」)は、内容の展開・結末を予告している。武將のいで

立ち、戦鬪の描写は、戦記物の模倣で、陳腐である。文を終止するには、だいたい終止形が用いられ、連体形・已然形で終止する用例は、それぞれ一カ所ずつである。(一)・(二)・(三)・(四)・(五)に見える「……た事なれば……」の既定の順接条件を表わす表現も、(六)で有力であった体言止めの感嘆文も、無い。

これらの事から考えると、少なくとも、(一)・(二)・(三)・(四)・(五)の作者とは違う作者が書いたように考えられる。

以上、四回にわたって、部分的にその特色を挙げたが、(一)・(二)・(三)・(四)・(五)は、同時代に作られたが、作者は重複はあるにしても、それぞれ、異なる作者が連作したものであり、(四)は後代に補足せられたように考えられる。

昭和49・50・51・52年にわたって、各部分の原文を掲げ、その荒筋を説明し、その表現や用語について私見を述べてきた。ここで、各部分との関連、全体を通して、再考察したい。

訂正：(一)の「小丹」は、「小丹」^{せん}、「詮方」^{せん}は「詮方」^{せん}、「三國警固なる……」

四頁の下欄の十五行目——最後の部分に「……」を付ける。その他についてはご教示をいただきたい。

(一)では、内容奇抜で、しかも因果応報や信仰の理念で貫かれている。春元は異常な出生であり、異常な運命を負わされている。

「(光元は……御座舟の用意にこそはかゝらるる)」、「(光元は……身を震はせていたりける)」、「……七年も移りける」などのように文の終止に連体形を用いている。これは、室町時代の終止・連体の同形化に關係があるから

前田「火の山」合戦記(平曲の詞)ならびにその成立(完)

も知れない。

(二)では、本文の入れ違いが二カ所あり、本文の途中に(三)への展開を予測せしめる語句(八火の山城に婚姻の時期を囃らせ給ふこそも合戦の初めなり)がある。それに、既定の順接条件を示すに、「……この事を御披露いたした事なれば……」統眉をひそめ……」のように「……た事なれば……」の表現が多く、また「……染ゆる春の桜木を植えし心地の目出度けれ」のように係助詞が無いのに已然形で終止するものもある。表現・用語について考えると、(一)の作者とは違い、(二)は、他の作者が連作したのではなからうか。

訂正：「同る」。

(三)では、(一)・(二)と構成が変わり、冒頭と最後に(四)以下への展開を予測させる語句(八白妙の優しき雪は肌をさく幸ひ転じて仇となる有為転変の世の中に小丹の中將春元は從二位の官に任せられ飛ぶ鳥落す火の山の榮華の夢もしばしにて此処に起きたる騒動は神の御告げの如くにて時の帝に引く弓の味気なき世と変わり行く)八おのれ憎つき小丹の中將此の怨みを晴らさんと手段を以て広直が時の帝を取り入れて無理が矢理でも火の山とひと合戦に及ばんと思ひ立つのできあ此れからどうでも火の山城内がさきめき渡ると云ふような愉快は後と知られたり)があり、しかも最後の部分の用語(「憎つき小丹」、「愉快」など)にも、特色がある。

また、途中に「人の心は一樣に善悪二つに限るなり」の教訓めいた一文を挿入している。表現では、常套文句である、「……た事なれば……」や文を連体形で終止することが見出される。しかし、最後の部分の用語の特殊性から考えて、(三)の作者は、(一)・(二)のそれぞれの作者とは違うように考えられる。

四では、勅使下向の道中（「尼ヶ崎より御座船を早や海上に進め給へば程もなく須磨や明石の浦々を過ぎて矢を射る如く漕ぐ舟は二十八里の播磨灘 見ゆる向ふは四國路や堅い約束石樋や 今はるばると岐島安芸の國さへ程過ぎて 三十六里の周防灘……」）の道行文紛いの美文、日頃圧迫されている民衆の權威に對する反撥を方言で面白おかしく表現したこと、春元從三位（實は從二位）盛平正三位（實は從三位）とした誤り、文の終りを連用形や已然形で終止すると言ふような破格、既定の順接条件を表わす「……た事なれば……」の常套句がないことが目立つ。これらから、四の作者は（一）・（二）・（三）のそれぞれの作者と違ふように考えられる。

訂正……四「大合戦開く……」は、大合戦開く……」。

四では、内容が（一）と同じように奇抜と言ふか、荒唐無稽と言ふか虚構性が強い。この最初の部分（八松平代に來ゆる緑も いつか枯れ 堅き金城鉄壁も時至らば その用を失ひここに名城火の山も滅亡の時至りける）は、（六）（七）の展開を予告したものととなっているが、最後の部分（八信太の次郎光直が使となつて大和へ登り 時の関白広直と命を的の対決がそも合戦の本となり 小丹の中將春元が 官軍相手に大合戦開くと云ふよな騒動は 後の愉快と知られり）は、（六）への展開を予測せしめるものとなっている。また、事件を次から次へと畳みかけ、多くの劇的要素を組み合わせて聴衆の喝采をねらっている。このように、（一）・（二）・（三）・四と比べて構成の形式も違つている。用語について言ふと、最後の部分の「愉快」の語は、（三）の最後の部分に現れるが、「官軍」「……云ふよな」の語や句、「……出すであらう」「……飲みます」「（光直は）……ねむつける」「（方言は）」「兵部は）……弱味を見せまいと……」などのなかの傍線を付けた語は、今日の口語的

用法であり、転写の時誤写したとも考えられないようで、誦い伝えたものを後に筆録したか、この誦い物の人氣に答えて、ずつと後、江戸時代あたりに他の作者が作ったものではなからうか。毘沙門天は武神であり、これに祈願して神祕が現れると言ふあたり、信仰を説く説教節か、江戸時代初期に流行した人形芝居の誦い物の感じがする。四の作者は、（一）・（二）・（三）・四のそれぞれの作者とは違ひしかも後の補足のように考えられる。

（六）では、武將のいで立ち・合戦の描写は、戦記物そっくりの模倣である。この最初の部分（八登り行く山も下りがあるとかや 流石盛りの火の山も早や合戦の時機となる）は、（六）の展開を、最後の部分（八さあ此れから大和の國が一同に煮えかやるか 砕けて飛ぶか 続いて火の山落城は 追追後と知られり）は、（六）の結末を予測せしめる。「煮えかやる」は、方言であろう。それに、文を連体形で終止する表現、「……た事なれば……」の常套句もある。

これから考えると、（六）の成立は、（一）・（二）・（三）・四と同じく古く、（六）の作者は（一）・（二）・（三）と同じ系統の作者であろう。しかし、（四）との関連、用語などから、現存の（六）は、（四）の挿入と共にいくらか改作して、（四）に続けたと考えられる。

（四）では、最初の部分（八名將の下に弱卒なし 臣君同一に相合はずとは云ふ作ら 運定まれば是非もなし）は、内容の展開・結末を要約している。戦鬪の描写は、戦記物の模倣で、陳腐である。文を終止するには、終止形が用いられている。「……たる事なれば……」のような、既定の順

接条件を表わす用法が、一か所ある。(丙)で用いられているような、体言止めの感嘆文は無いようである。これらから、(甲)の作者は、(丙)の作者か、その関係者かであるように考えられる。

以上のように考えると、この合戦記は、(一)・(乙)の七つの部分に分けられている合作物であるが、用語や表現の上からは、部分によっては後に修正・補足されたもののように考えられ、作者の重複はあろうが、それぞれ作者が違い、各部分が平曲(金峯琵琶)によって語られたものを、後に筆録するに当って全体的にまとめたもののように考えられる。

さらに、次のような対照において再考してみたい。

注 傍線は、比較の必要から付けた。

各部分の最初は、

△千代の舞八千代の剣 末までも武名を天下に轟かず 世は万代に治まりて 上は一
天万葉の しもべは下民に至るまで 貴賤尊卑のわかちなく 日本六十余州治まる 御代
の時こそは 頃しも人皇二十九代欽明天皇の御宇 太刀は鞘 槍はなげしと泰平の中に
起こりし騒動は ここに中国安芸周防長門の三國警固なる 前田火の山の御大将小丹の
彈正光元として ゆゑしき弓取おはします▽(一)

△時津風天の御蔽ひ絶えやらぬ 股肱の臣等一同は 君を守護し奉り大和の皇居に御
參内 新たに下ろす御新造 神風さつと吹き来り順風にまかして漕ぐ舟は あたかも矢
を射る如くにて 浪華の浦に着きにける 小丹の中將春元は 舟を待たせて臣等をば左
右に従へ 大和なる時の関白広直卿のおん館に着き給ふ▽(二)

△白妙の優しき雪は肌をさく 幸ひ転じて仇となる 有為転変の世の中に 小丹の中
將春元は 従二位の官に任ぜられ 飛ぶ鳥落す火の山の栄華の夢もしばしにて 此処に

前田「火の山」合戦記(平曲の詞)ならびにその成立(完)

起きたる騒動は 神の御告げの如くにて 時の帝に引く弓の 味気なき世と寄り行▽

(三)

△写し給に変わり行くは 悲しけれ▽(四)

△松千代に栄ゆる緑も いつか枯れ 堅き金城鉄壁も 時至らばその用を失ひ こと

に名城火の山も 滅亡の時至りける (五)

△登り行く山も 下りがあるとかや 流石盛りの火の山も 早や合戦の時機となる▽

(六)

△名將の下に弱卒なし 臣君を同一に相合はずとは云ひ乍ら 運定まれば是非も

なし▽(七)

以上のように、(一)・(二)・(三)・(六)では文を終止するのに終止形、(四)では已然形、(五)では連体形を用いている。(四)のように已然形を用いるのは(乙)の本文中に見える。したがって、(一)・(二)・(三)・(六)は、同じ系統の作者であり、(四)・(五)は、それぞれ別の系統の作者のように考えられる。

各部分の最後の部分は、

△元服祝ひに 春元は血氣の勇士十余名前後左右に從はせ 大和の皇居に參内の結果
が 如何に相成るか いやいよ前田の火の山が 上下活躍の大騒動は 追々後と知られ
たり▽(一)

△どうせ一度は火の山に かゝる大事がさし起こり 関白殿を向ふに立て 無理矢理
でも朝敵の汚名を曇り 飽くとも 従二位中將春元が 都の方へ攻め上り ひと合戦と

云うような いや火の山合戦の大眼目のひと巻は 追々後と知られたり▽(二)

△あのれ憎つき小丹の中將 此の怨みをば晴らさんと 手段を以て広直が 時の帝
を取り入れて 無理が矢理でも 火の山とひと合戦に及ばんと思ひ立つので さあ此れ

から どうでも火の山城内がささめき渡るような愉快は 後と知られたり▽(三)

△さあ此れから 如何なる難題がかゝるか 火の山城の大忠臣 当年十七の信太の次
郎の光直が 忠義のために身を捨て、荒行致して 神明の利益を曇り 御勅使の加藤の

次郎忠澄と 対決した其の末は 首筋 擱かつんで都へ登り 時の関白広直卿を向ように立てて 光直が命にかけて 対決をしようと言ふ あま騒動は 公家と武士との意気地立ても 矢弾を飛ばししを削る騒動は 後と知られたり(四)

△信太の次郎光直が 使となつて大和へ登り 時の関白広直と命を的の対決が そも合戦の本となり 小丹の中將春元が 官軍相手に大合戦開くと云ふよな騒動は 後の愉快と知られたり(四)

△さあ此れから 大和の園が 一同に煮えかやるか砕けて飛ぶか 続いて火の山落城は 追々後と知られたり(六)

△群がる敵を蹴散らして 勇士と共に火の山指して 御燔城をあらせられたる春元公城の出丸へ火を移し 御本丸なる大広間 中將始め御台様勇士一同枕を並べ 事も衰れな御生誓 消え行く葉露散る花の 帝はかくと聞こし召し 一逆臣ならぬ春元を 関白広直が悪意のため 朝敵と名を汚せしは 慄然の限りなり」と 歴史の中に残されて今の世までも金言に残る火の山合戦の履歴をここに巻き収め 語り広へて目出度けれ(七)

以上、傍線を引いた語や句からは、(一)・(二)・(六) 後と改作がなされた(四)のそれぞれの作者は、同じ系統に属し、(三)・(四)のそれぞれの作者は、共に「愉快」と語う語を用いているところから、他の系統に属するように考えられる。(四)の作者は、(四)の作者と関係があるようだが、全文の用語や表現をみると、後代の別の作者によって補足されたもののように考えられる。

そうすると、最初の部分について比較した場合の見当とく違ひよう。この事を念頭において、各部分の用語や表現について、比較してみよう。

(一)の本文の訂正……「三國警固なる……」、「小舟」は、すべて「小丹」、9頁の下の最後の四行を△の中に入れる。

(二)では、「(光元は)身を震はせていたりける」・「浮世の常の情無き」などのように連体形で文を終止する、既定の順接条件を示すのに「……事なれば……」とか「……た事なれば……」とかを用いる、体言止めの感嘆文を用いる、「どうがな致して……」の「どうがな」の方言的用語が混入している。「大権現も情ない」・「絶えようが汚りようが……」の「情ない」・「……よう」のような口語が見出される。

(三)では、連体形で文を終止する用例がある、「……事なれば……」・「……たる事なれば……」の表現を取る、口語の断定の助動詞「……だ」の訛音「……ちゃ」が用いられている。

(四)の最後の部分(「……騒動は追々後と知られたり」と、(二)の最後の部分(「……合戦の大眼目のひと善は追々後と知られたり」とを比較してみると似た部分もあるが、(一)は「騒動」、(二)は「合戦」の用語で、(一)・(二)は同時代に成立したであろうが、作者は異なるように考えられる。

(三)の本文の訂正……「倭奸邪習なる……何ひ……、勇み立ち……」

(三)では、連体形で文を終止する用例は少ない、「……事なれば……」・「……たる事なれば……」が目立つ、最後の部分(「……城内がさきめき渡ると云ふよな愉快は後と知られたり」)の表現は、(一)・(二)のそれらとは違ひよう。これらから、(三)の作者は、(一)・(二)のそれぞれの作者とは違ひよう。

うに考えられる。

(四)では、「写し絵に変わり行くは悲しけれ」・「あざけり笑ふも道理なれ」・「この姿こそ……磨る乙女にて候」のような破格の用法がある、連体形で文を終止する用例は少ない、「忘れ参らせる」・「示し参らせる」・「申されまい」・「来い」などの口語が混入している、「聞いたかい」・「おしやくしちふもの」・「立つたげなぢやないかい」・「ごつばもまいこと」・「云ふない」・「ちがふわい」・「そいつが抜かす事にやな……」・「云ふようぢや」・「……ぢや」などの方言混入の用例や訛音が多い、(二)で春元は従二位であったのに従三位盛平は(二)で従三位であったのに正三位となっている、最後の部分「……あま騒動は……後と知られたり」の「あま騒動」と言う語は(四)だけに
ある。これらから、(四)の作者は、(一)・(二)・(三)のそれぞれの作者とは異なり、また口語の混用が目立つことから、成立後時を隔てての筆録か後の補足かのように考えられる。

(四)の本文の訂正：頼るぞや、願ひ出す。()

(四)では、連体形で文を終止する用例がある、「……事なれば……」・「……た事なれば……」の表現がある、「受ける」・「立たう立つまいの……」・「……出たすであらう」・「今見るような心地……」・「飲みます」・「ぬめつける」(近松の女盛)「……などの口語混入の用法など筆写の時の誤写と考えるには余りに多い、最後の部分(「……騒動は後の愉快と知られたり」)の「愉快」と言う語は、(四)で用いられている。これらから、(四)の作者は、(一)・(二)・(三)のそれぞれの作者と異なると考えられる。しかも、口語が相当混入しているところから、後に補足された部分でないかと考えられる。

前田「火の山」合戦記(平曲の詞)ならびにその成立(完)

(六)の本文の訂正：お別れにならうも知れず……、一刀を鞆んと……。()

(六)では、連体形で文を終止する用例や「……た事なれば……」の表現が相当ある、「許される」のような口語や「煮えかやる」のような方言もある、最後の部分(「……火の山落城は追々後と知られたり」)の「追々後と知られたり」の表現は、(一)・(二)にも用いられている。これらから、(六)の作者は、(一)・(二)のそれぞれの作者と関係があると考えられる。

(六)では、連体形で文を終止する用法や「……たる事なれば……」の表現はそれぞれ一つしか見当らない、係助詞「こそ」がないのに已然形で文を終止している、また「不知案内の旅いくさ」・「最早逃がれぬ汝が運命」など体言止めの感嘆文が目立つ。

これらから、(一)・(二)・(三)・(六) (後に改作されて現行のもの) ・(四)は、同じ系統で、作者の重複はあるが、各部分を作者が分担し、これらもも
ととなって(四)・(六)あたりが後に補足され、筆録の際に全体としてまとめられたと考えられる。

物語は、六世紀の欽明帝の時代のことであるが、「平家物語」の成立が十三世紀半ば過ぎるとすると、この原形は十四・五世紀以後成立し、その後挿入された補足や全体のまとめの上からの改作の個所があり、謠い継がれて後に筆録されたのではないかと考えられる。それは、連体形で文を終止する用法が室町時代(15世紀半ば)の終止形の連体形化と関係があり、口語の混用が後の筆録を予想せしめるからである。

要するに、この合戦記は、平曲による平家物語の人氣に投じて、平曲演奏者たちか無名の作者たちかの部分的に制作したものが、筆録するに當って全体としてまとめられた合作物と考えられる。それは、各部分の用語・表現の差異に、その証拠を見出す。しかし、この物語を生むに至った素材とも言うべき伝説については、ほかに寡聞にして知らない。

この荒唐無稽とも言うべきロマンを七・五調で謡い上げさせたものは、この山が関門を扼しておりかつては狼煙を揚げる山であり、その秀麗さに打たれる感動から起こったフィクションではなからうか。

平曲に合わせて語られるものは、天台宗の勤行ごんぎょうの一型式であるしよ。明が平曲に取り入れられた結果生じたものようである。北浦地区や島根県の一部には、地鎮祭では「金光明最勝王經」・「地神經」または「大般若經理趣令」を、台所の三宝荒神を祀るには「三宝大荒神經」あるいは「般若心經」などを、琵琶に合わせ読誦することが残存している。

このことから考えると、古くは同宗門の座頭法師（後附領つたと言ふ。）が平家を語るようになったのであろう。明治の初めには、法師の余技となり、琵琶を弾じながら平家だけでなく色々な合戦記・物語や歌謡を謡い語るようになり、地鎮祭や荒神祭の後の余興のようなものになったので、同宗派間でお互の品格保持上平曲を弾じないように申し合わせ、遂に滅びたと言われる。この合戦記は、古くから全部を語ると火事があると言ふ迷信があり、全部を写すことを避けたと言われる。幸いに、完本が残ったが、誤字や当字がある。筆者は

四回にわたって全文を掲げた。しかし、右側に？や字を付けたところについては、これ以上正すやすがない。原本をご覧になった方が、資料をお持ちの方が、これらを訂正して頂きたい。なお、この成立についてご教示を給われれば、幸甚である。

資料を提供された吉村次郎氏や平曲研究油谷敏一氏に謝意を表したい。